アンデルセンの光と影

――その『自伝』から

関　英雄

「私の一生は事件の多い幸福な一生でした。それは、まるで一つの美しい物語のようです。」と書き出される、童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン（一八〇五～一八七五）の『自伝』を、大畑末吉訳の岩波文庫版で初めて読んだのは、二十代半ばの頃だった。

アンデルセンが五十歳の時出版されたこの『自伝』（原題「わが生涯の物語」）の印象は好悪半ばしていた。極貧の靴直しの家の子である彼が十五歳で志をたて、無一文同様の身で独りコペンハーゲンに出てきて、彷徨浮沈の末に作家として世に出るまでの前半はドラマチックで興味深い。旅好きで生涯の間にヨーロッパ各地からトルコまで何回も旅行した旅の追想はおもしろい、初恋に敗れたことや、スエーデンの歌姫ジェニイ・リンドとの深い交友なども『自伝』の色彩りだが、それでも彼が功成り名遂げてからの後半の記述は興ざめだ。興ざめの理由は、出世して隣国ドイツの王侯貴族にまで顔の利くようになったアンデルセンが、上流社会の人びとがどこでも彼を歓迎してくれることを、鼻につくくらい書きつらねていることだ。この自己顕示が、極貧の出である彼のコンプレックスの裏返しであることが容易に推測できる。

けれど私は、自伝であるからには書かれたことはすべて事実と、長い間信じていた。アンデルセンの『自伝』に嘘や、事実を隠したきれいごとが書かれていると知ったのは十一年ほど前のことである。知己の北欧文学研究家山室静氏が、当時新刊の著書『アンデルセンの生涯』（一九七五年・新潮社）を送ってくれたのを読んでわかったことだ。（ちなみに、この書はアンデルセンの評伝としてそれまでになかった画期的なものだ。）

まず第一は『自伝』の最初の章にアンデルセンの母は父より二つ年上とあるのが違っていた。山室評伝は「結婚した時に父ハンス・アンデルセンが二十二というのはいいとして、母アンネ・マリイは二つ年上どころか、私生児として記録がないため正確なことはわからないが、多分十五歳ほど年上だった。」と書く。（註・どうしてこの年齢差がわかったかと、山室氏に会った折り訊ねたら、デンマークへ現地取材に行って追跡調査したという。）続けて「（人生や世間のことは何も知らない）どころか、アンデルセンの父と結婚する六年

ほど前に瀬戸物の行商をしていた男にだまされて、一人の娘を生んでいる。」とある。一人っ子で母に溺愛されたアンデルセンが母を美化したのはわかる気がするが、十三歳も年齢のサバを読んだのはなぜか？　アンデルセンのような文学者も世間体にとらわれるのかと思った。

第二にアンデルセンは彼の酬われぬ恋愛を正直には書いていない。二十五の時知りあった初恋の女性リボアについて『自伝』では、「私は思い違いをしていた。彼女には婚約者が居たのだった」と、あっさりあきらめたように書かれているが、山室評伝はアンデルセンの二十七歳の時書いた「回想記」に、彼女に婚約を破棄させても自分の許に来させようと求愛の手紙を書いて無視されるが、それでもなお希望を捨てなかったことが記されているとある。アンデルセン童話「仲よし」は玩具のコマが玩具のマリに恋して酬われない話をユーモラスに描いているが、このリボアへの失恋を象徴化した作品と見られている。

彼の無名困窮の頃からのパトロンである枢密顧問官コリンの娘ルイーゼに失恋したことは、相手が恩人の娘のためか『自伝』では伏せられている。三どめの恋の対象は一八四〇年、彼が既に作家的声名を得た三十五歳の時知りあった、スエーデンの二十一歳の歌姫ジェニイ・リンドで、『自伝』は彼女のためにわざわざ一章を設け、彼女の美しさと芸術的才能のすばらしさに絶讃の辞をささげている。リンドをアンデルセンは「兄のようなきもちで愛した」と書いているが、実際は強い恋心を抱きつづけたことを山室評伝は、アンデルセンの日記の断片から立証している。この恋も稔らず、リンドはやがて他の男と結婚した。『自伝』の水でうすめて味のなくなった恋愛記は、五十歳にもなって過去の失恋の傷の深さを書くことのかっこう悪さも考えたのだろうが、それよりも彼女たちや関係者がなお現存することをおもんばかって当たりさわりのないことを書いたと見たい。

以上のことに限らずこの『自伝』全体の性質がアンデルセンが自分を美化した多くの粉飾に包まれているのだ。私は最近まで思い至らなかったのだが、『自伝』の原題「わが生涯の物語」の物語の語のもつ意味は大きい。物語ならフィクションが混入してもいいわけだ。アンデルセンのこの自己美化を山室評伝は、極貧から身をおこし多くの人々の助けで才能を発揮できた幸運が自分でもふしぎでならない〝神の愛の手に導かれた〟ような幸福感に基くとしている。この稿の冒頭に引用した『自伝』の書き出しの文章はそのことを語る。自分の人生を「まるで一つの美しい物語のよう」とはまさに陶酔のことばである。

けれど三回の失恋から生涯独身で通したその傷は深かったと思われる。アンデルセンが失恋の騎手だった理由を、山室氏は彼の容貌もさることながら男らしくない弱気な性格を第一に挙げている。貧困家庭に育ち、人の情にすがって生きた少青年時代に造られた自分の孤独の中にこもる性質も終生つきまとったアンデルセンは、必ずしも幸福そのものだったとは考えにくい。その人間的な哀しみも喜びも、偽りのない真実として彼の童話文学の中に表現されている。『自伝』の評価は別として、その点アンデルセン童話の多くは彼の生活の中から生まれた真の文学なのだ。